

ディケンズ対マリアット

—新たに発見された手紙をめぐる—

渡 部 智 也

1. 新しい手紙

2016年3月6日、ディケンズ研究者にとって大変興味深い記事が英国のサンデー・テレグラフ紙に掲載された。これまでその存在が公になったことのない新たなディケンズの手紙が、オークションに出品されたというのである。その手紙の中でディケンズは、自身の雑誌『一年じゅう』(*All the Year Round*)に記事を投稿した若い作家フローレンス・マリアットが、彼女の作品への批評を求めたのに対し、彼女の作品はきわめてつまらないものであり、その要求は「全く不合理なものだ」とはねつけたという。ディケンズは19世紀を代表する小説家であるとともに、自ら主宰する雑誌の編集長という側面も持っていた。しかし彼は、自身の雑誌に作品を投稿する作家達としばしばトラブルを起こすことがあった。というのも、編集長としての彼は極めてワンマンで厳しく、多くの執筆者に自分の望むような形で記事や作品を書き換えることを求めたためである。¹中でももっとも有名なのは、エリザベス・ギヤスケルとの対立であろう。『一年じゅう』の前身に当たる雑誌『ハウスホールド・ワーズ』(*Household Words*)に様々なエッセイや小説を寄稿していたギヤスケルであったが、自身の作品に対するディケンズの度重なる改変要求を経て両者の関係は悪化してゆく。そして小説『北と南』(*North and South*)をめぐる両者の対立は決定的なものとなり、その後彼女はディケンズの雑誌に小説を寄稿しなくなってしまった。²対立の過程で、ディケンズは副編集長ウィルズ宛ての手紙の中で、「自分がギヤスケル氏であったなら、彼女を殴ってやりたい」(“If I were Mr Gaskell, O heaven how I should beat her!”;7:700)とまで述べた。一方のギヤスケルの側も、後にディケンズが妻と別居し、自身

と義妹ジョージナ・ホガースにまつわるゴシップを否定する一文を『ハウスホールド・ワーズ』にわざわざ掲載した際に、「家庭の内情を公表したことに対するもっともな嫌悪の感情 (well-grounded feeling of dislike) ゆえに、ディケンズ氏は今非常に不人気になってしまっている」(*Letters of Mrs Gaskell* 535)と述べるなど、両者の関係が冷え込んでいる様子が窺える。今回その存在が明らかとなった手紙は、このような、彼と執筆者との間の新たなトラブルを提示するものなのであろうか？本稿では、これまでほぼ研究されることのなかったディケンズとフローレンス・マリアットの関係性を考察し、この手紙の意味するところについて考えたい。結論を先取りすれば、この手紙はサンデー・テレグラフ紙が示唆しているような、若い作家に対するディケンズの冷たい態度を示すものでは決してなく、むしろ彼は当然の振る舞いをしたと考えることが出来るのである。

2. ディケンズとマリアット

まずはディケンズとフローレンス・マリアット、この二人の作家の関係についてまとめてみたい。両者の関係を一言で言えば、当時既に大きく名をあげていた有名作家(=ディケンズ)と、その友人の娘、というものであった。というのも、フローレンスの父フレデリック・マリアットは海洋小説家として名をはせた人物であり、ディケンズの友人でもあったからだ。彼はルサーージュやスモレットらのピカレスク小説に影響を受け、数々の小説を執筆したという点において、ディケンズとの共通点を見出すことが出来る (Davis 284)。サザランドはマリアットの作品が、ディケンズの『オリヴァー・ツイスト』に影響を与えた可能性を指摘している (414)。この

¹ ディケンズの書き換え要求はなにも小説に対してのみ向けられたのではなく、エッセイ等の記事に関しても同様であった。たとえば『ハウスホールド・ワーズ』に「夢」(“Dreams”)と題する記事を投稿したトーマス・ストーン医師は、ディケンズから「もう少し独創性を出し、もう少し本に書かれているようなことを繰り返すのを減らしてほしい」と言われ、記事の書き換えを余儀なくされている (6:276)。この事実からは、ディケンズが眠りや夢といった分野に強い関心を持っていたということに加え、記事の中身に納得がいかなければ専門家に対しても厳しくそれを指摘する、断固たる編集者であったことが窺える。

² 『北と南』をめぐる両者の対立とその意味については、拙論「ディケンズのたくらみ—ギヤスケルの『北と南』のタイトルをめぐる—」(『福岡大学人文論叢』第47巻2号 (2015):477-95)を参照のこと。

ような共通点、影響関係ゆえであろうか、ディケンズはマリアットのことを高く評価していたとされる。たとえば両者の友人であったジョン・フォスターは『ディケンズ伝』の中でマリアットの死に言及し、彼を“one of the first of Dickens's liking” (101) と評している。またフローレンスによる『マリアット伝』の中では、ディケンズのことは“the most intimate of his literary allies” (283) と表現されたほか、亡くなる少し前に、彼はモルヒネで朦朧とした状態で、幻想の中のディケンズと会話していたという (288)。いずれも両者の親しい関係を示す事例と言えよう。フローレンスはこの作家マリアットの11人目の子供 (末娘) であり、その彼女自身、1860年代半ばから執筆活動を始め、最終的には父の伝記も含めて、実に90以上の著作物を残す多作の作家となるのである。

そのディケンズとフローレンス・マリアットの関係であるが、そもそも両者にはどの程度の面識があったのだろうか? 明確なことは不明であるが、前述したように、彼女はフレデリック・マリアットの末娘であり、父親が亡くなった段階ではまだ15歳の少女であった。そのため、当初両者の間に深い交流と呼べるほどのものはなかったと想像出来る。実際、現存するディケンズから彼女宛てた最初の手紙は、以下に見るとおり極めて事務的かつ短いもので、その文面からは、両者の間に特別な交流があったことは読み取れない。

Mr. Charles Dickens presents his compliments to Miss Florence Marryatt and begs to say that he will be happy to subscribe for five copies of her song. If they be delivered to Mr. Wills at the Household Words office, he will pay the subscription.

(7:67, 下線部引用者)

これは1853年4月19日に書かれた手紙であるが、この時点で41歳のディケンズに対し、彼女はまだ20歳である。注意すべきは、この中でディケンズがマリアット (Marryat) の綴りを間違っているということだ。この事実もまた、当時両者は頻繁に手紙のやりとりをするような間柄ではなかったことを示すものと言えよう。³ この後、両者のやりとりには長い空白期間があり (これは翌1854年に彼女が結婚し、インドに渡ったためと考えられる)、次に両者のやりとりが見られるのは、1865年のディケンズから彼女宛てた手紙を待たねばならない。すなわち、今回新たに発見された1860年の手紙は、その空白を埋める役割を果たすものであると同時に、両者

の間には1860年前後においてすでに文学的な交わりがあったことを示す、価値あるものと考えられるのである。

3. ディケンズ対マリアット

既に述べたように、ディケンズとフローレンス・マリアットの関係を示唆する最初の手紙は1853年に書かれ、その後は1865年までおよそ12年間の沈黙が保たれていた。その空白期間を埋めるかのように現れたのが、今回新たに発見されたディケンズの手紙である。3ページからなるこの手紙は、端的に言えば雑誌編集長から投稿者への説明の手紙である。マリアットは、投稿した自身の作品が雑誌『一年じゅう』に掲載されなかったことを受け、その理由を同雑誌の編集長であるディケンズに問いただした。それに対してディケンズが送った返事がこの手紙である。残念ながら手紙のオークションが終了してから約半年が経過した2016年9月段階で、その全文は明らかになっておらず、またその公開がいつになるかも定かではない。そもそも、公開されるか否かも不明である。しかし、この手紙を出品したオークションハウスのボナムズ (Bonhams) の公式サイト、一般に公開されている手紙の1ページ目の画像、そして本件事案を最初に取り上げたサンデー・テレグラフ紙の記事から、かなりの部分を読み取ることが出来る。まずはサンデー・テレグラフ紙の報道に基づいて考察を加えていきたい。

最初にサンデー・テレグラフ紙は、彼女の作品に掲載できない理由としてディケンズが次のように述べていると手紙から複数の引用をおこなっている。以下に挙げるものは、同紙が引用したディケンズの言葉であり、数字は同紙がその引用をおこなった順序を表している。これはその順序が重要であるために数字を付しているのだが、ディケンズが書いた順番を表すものではなく、あくまで同紙が引用した順である点に注意して欲しい。⁴

- (1) I cannot, however, alter what seems to me to be the fact regarding this story (for instance), any more than I can alter my eyesight or my hearing.
- (2) I do not deem it suitable for my Journal.
- (3) You ask me to pass my pen over the paragraphs which displease me. Surely that is scarcely reasonable.
- (4) I do not think it is a good story. I think its leading incident is common-place, and one that would require for its support some special

³ そもそもディケンズは、親しかったとはいえ、父マリアットともそれほど手紙を交わしていなかったと思われる。事実、ピルグリム版『ディケンズ書簡集』の中で、ディケンズによるフレデリック・マリアット宛ての手紙は2つしか確認することが出来ない。

⁴ 以下、特別に言及しない限り、本稿におけるディケンズのフローレンス・マリアット宛ての手紙への引用は、すべてサンデー・テレグラフ紙の記事 (“Unseen Charles Dickens letter reveals rude retort to fan”) によるものである。

observation of character, or strength of dialogue, or happiness of description.

- (5) I do not find any of these sustaining qualities in it.
- (6) I am not interested in the young people, therefore, and I cannot put away from myself the unfortunate belief that the readers of *All The Year Round* would not be interested in them.

引用の(1)から(3)にあるように、まずディケンズは自らの判断を変えるつもりがない旨を強調して伝えるとともに、彼女の要求を理不尽なものだと非難している。その上で、彼が作品の掲載を拒否した理由として、(4)や(5)に見られるように、そもそも彼女の投稿作品を良い物語だとは思えなかったということ、作品の主題がありふれていて、それを補うべき他の要素が不足していると感じたということを挙げ、さらに(6)にあるように、その作品内容が同誌の読者が期待するものとは違うように思われたということを挙げている。いずれも雑誌の編集長が投稿者の作品を非掲載と判断する理由としてはもっともに思われる。

さらにサンデー・テレグラフ紙は、「非常に憤っているということが伝わらないといけないので、彼は次のように付け加えている」(“In case he had not sounded sufficiently indignant, he added”)と述べて、手紙からのさらなる引用として以下のディケンズの言葉を挙げている。

- (7) You have no idea of the labor inseparable from the editing of such a Journal as *All The Year Round*, when you suppose it within the bounds of possibility that those who discharge such duties can give critical reasons for the rejection of papers.
- (8) To read professed contributions honestly, and communicate a perfectly unprejudiced decision respecting every one of them to its author or authoress, is a task, of the magnitude of which you evidently have no conception.

「あなたは編集者の苦労を少しも分かっていない」という言葉を、最初と最後で表現を変えて繰り返しているように、この文章を読めば彼が腹を立てているということは容易に読み取ることが出来るだろう。このようにサンデー・テレグラフ紙の報道により、ディケンズがマリ

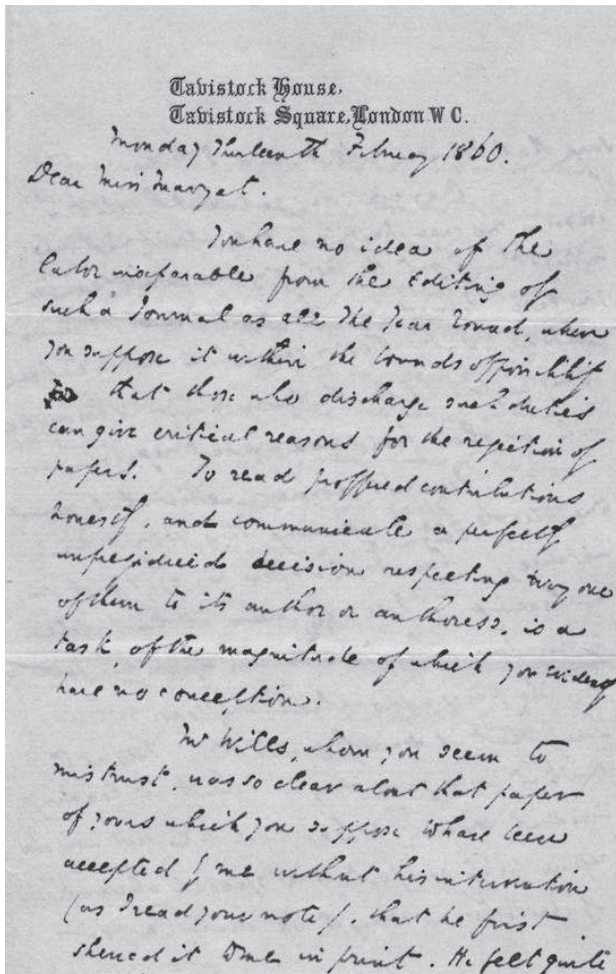
アットの投稿作品を全く評価しておらず、また彼女の要求は理不尽なものだと腹を立てていることがよく分かる。

一方、この手紙を競売にかけたオークションハウスのボナムズも、そのホームページ上で手紙の中身に関する情報を提示しているが、そこに書かれた内容は、サンデー・テレグラフ紙の記事と微妙に食い違っている。⁵ ボナムズは、まず「ディケンズは、彼に対する彼女の要求ははなはだ不合理なものだと非難している」(“he upbraids her for being utterly unreasonable in her demands upon him”)と述べて、上に挙げた(7)と(8)の文章を最初に取り上げている。そして彼女に対し、彼は編集者として「一つの目的、一つの利益のみを追求しており、それはすなわち、最高の読み物を掲載するということだ」(“as an editor, he has ‘but one object and one interest—to get the best writing possible”)と念を押し出したと言い、その上で最後に「彼女の物語を非常に強い口調で批判して、手紙を締めくくっている」(“concludes by condemning her story in the very strongest terms”)と述べて、上記の(1)から(6)の文章を引用している。つまり、サンデー・テレグラフ紙とボナムズで、この手紙の構成に対する認識が大きく異なっているのである。

いずれがより真実を反映していると言えるかは、記事とあわせて公開されている手紙の一枚目の画像(資料1)を見ることで明らかとなる。というのは、画像を見る限りでは、上記の引用(7)と(8)、すなわちディケンズがマリアットの要求を理不尽だと突っぱねた箇所が、手紙の最初に見られるためである。ディケンズ特有の非常に読みやすい文字で書かれており、(7)と(8)の文章が手紙の冒頭に続けて書かれていることに疑いの余地はないだろう。このようにディケンズは手紙の中で、何よりもまず最初にマリアットの要求を突っぱねているのである。従って、この部分について、「憤りが伝わらないといけないので、さらに付け加えた」というサンデー・テレグラフ紙の記者の言葉は、明らかに事実と反するものだということがわかる。

なるほど、これは〈レトリックの問題〉といえればそれまでなのかもしれない。しかし話の順序として、まず掲載不可の理由を無数に並べ立てた上で、あたかもとどめの一撃とばかりに、「著者(マリアット)の要求は誤りである」と述べた、というのと、マリアットの要求は非常に理不尽なものだと述べた上で、それで終わらせずに、細かく掲載不可の理由を説明していく、というのでは、読み手が受ける印象は大きく異なるであろう。その

⁵ 以下、ボナムズ公式サイトへの引用、さらにはボナムズのサイトにのみ掲載された(サンデー・テレグラフ紙が引用していない)ディケンズの手紙からの引用は、すべてオークションの商品紹介ページ(“Lot 169: DICKENS (CHARLES)”;<https://www.bonhams.com/auctions/23459/lot/169/>)からのものである。



資料1 ディケンズからマリアットへの手紙の1ページ目
(オークションハウス Bonhams 公式サイトより
<<https://www.bonhams.com/auctions/23459/lot/169/>>)

意味で、このサンデー・テレグラフ紙の表現は正確さを欠いていると言わざるを得ない。

さらに記事を精査していくと、奇妙に思えることがいくつも浮かび上がってくる。記事の冒頭、同紙の記者は次のように述べている。

When your father's close friend is one of the best-loved writers in the history of English literature, not to mention editor of his own journal, it would not be unreasonable to request a small leg-up for one's own fledgling career. (Furness)

父の親友が時代を代表する作家であり、しかも雑誌の編集長であれば、駆け出しの作家が手助けを求めるのは至極もったもな事、と言うのだが、果たしてそうだろう

か。これは別の言い方をすれば、〈知己の投稿者に対して特別扱いを施す〉ということであり、プロの作家、及び編集長としてはあるまじき行為と言えるものなのではあるまいか。またそのように考えていくことで、ある違和感に気づかされる。それは、この手紙が冒頭、“Dear Miss Marryat” という呼びかけで始まっていることだ。このことは、この画像が手紙の1ページ目であること、確固たる証拠となるわけだが、一方で、マリアットはこの時点で既婚者であり、そもそもミス・マリアットではなくなっているのである。彼女は1854年に軍人であるロス・チャーチと結婚している (Sutherland 411)。彼女は後の1879年に離婚し、新たにフランシス・リーン大尉と再婚するのだが、この1860年の時点では、彼女がロス・チャーチ夫人であることに疑いの余地はない。実際、その後の彼女宛ての手紙においてディケンズは、“Dear Madame” (11:63)、“My Dear Mrs Ross Church” (11:405) といった呼びかけで手紙を書き出しており、この手紙だけがそれらとは違う特別な書き出しの手紙ということになる。既婚女性に対してわざわざ「ミス」と明記するということは、エチケットの点から見てもまず考えにくい。また、この手紙がそれより前に彼に対して送られた、不掲載の理由を問う手紙への〈返事〉として書かれたことを考慮すれば、ディケンズがうっかり間違えたという可能性もまずない。そうなると考えられるのは、彼女自身が直前の質問の手紙で自ら「ミス・マリアット」と署名したという可能性だけであろう。実際、サンデー・テレグラフ紙の記事では言及されていないが、ボナムズ公式サイトに付された説明書きによれば、ディケンズは手紙の中で、“your name is associated with an old friend and a great regard” と彼女の名字にも言及しており、彼女が「ミス・マリアット」という署名で手紙を送った可能性はきわめて高い。わざわざこのように旧姓を利用した背景に、マリアットが記者が言うような〈特別扱い〉を受けると狙った、ということが考えられるのではないだろうか。⁶そして、ディケンズが手紙の中でわざわざその名字に言及した、ということは、彼自身その意図を見抜いたのではなかろうか。だからこそ、彼はプロの作家・編集者としての矜持を傷つけられたように感じ、厳しい調子の手紙を送ったのである。記者はディケンズが手紙の中で、彼女の要求について「驚くほどに無礼」(“wonderfully rude”) と記したと述べているが、むしろ彼にそのような激しい言葉を使わせるようなことを彼女がしたと考えるべきであろう。

そもそも、サンデー・テレグラフ紙の記事は表題の付け方という点でも大きな疑問がある。同記事は、

⁶ 後に彼女が小説家として本格デビューを果たす際に、彼女はフローレンス・マリアットという名で作品を書いている。だが、この時点ではまだデビュー前であり、ディケンズがわざわざ手紙でその名前に言及していたこともあわせて考えれば、単なるペンネーム以上の意味合いがこの時には込められていたと考えるべきだろう。

“Unseen Charles Dickens letter reveals rude retort to fan”と題されている。ディケンズの対応を「無礼な」(“rude”)と表現するのは是非はさておくとしても、マリアットを「ファン」(“fan”)と表記することは無理がある。⁷なるほど、後に作家として名を残す人物とはいえ、この時点ではまだ作家として本格的なデビューはしておらず、その意味では確かに素人も同然である。だからこのような表現を用いたのかもしれないが、しかしこの時の彼女の立場は、単なる一ファンではなく、雑誌の投稿者である。またディケンズに対する要求も、ファンとしてのものではなく投稿者としてのものであり、そのような人物を「ファン」と表現することは、どう考えても事実をゆがめているとしか言えまい。ディケンズがマリアットに対して、あまり好意的とは呼べない手紙を書いたことは間違いのない事実であろうが、サンデー・テレグラフ紙の記事はその一面だけをとらえ、ディケンズにとって不利な印象を与える部分のみを誇張しているように感じられるのである。

4. ディケンズ対テレグラフ紙

ここまで、新たに発見されたディケンズによるフローレンス・マリアット宛ての手紙の意味について考察してきた。その結果、この手紙は必ずしも本件を報じたサンデー・テレグラフ紙が主張するような、ディケンズの投稿者に対する無礼な振る舞いを反映したのではなく、むしろ彼の当然の怒りを映した手紙と考えるべきであることが明らかとなった。ここでは本論の締めくくりとして、ディケンズと今回の報道をおこなったサンデー・テレグラフ紙、及び少し範囲を広げ、同じテレグラフ・メディアグループに属する姉妹紙のデイリー・テレグラフ紙(以下、本稿では個別の新聞に言及する場合を除き、同グループ紙の総称として「テレグラフ紙」を用いる)の関係を考察するとともに、今回の記事でサンデー・テレグラフ紙が言及しなかった、ディケンズとマリアットのその後の関係について考察を加えたい。

この手紙に関する記事がサンデー・テレグラフ紙に掲載された後、ディケンズ研究者の間ではこの手紙の持つ意味をめぐって様々な意見が交わされた。その中で、トニー・ポイントンは次のように述べて、テレグラフ紙を批判している。

The newspaper, *Daily Telegraph*, has had a principle of denigrating Dickens over a long period of time,

often aided and abetted by people who should know better. One time they even published an erroneous piece which gratuitously harmed one of his living descendants. (Message to Patrick McCarthy. 2 April 2016)

ポイントンはディケンズ研究者の中でもとりわけディケンズと妻キャサリンの関係、さらには愛人エレン・ターナンとの関係について強い関心とこだわりを持つ人物である。そのため、ディケンズのスキャンダルを扱った報道や批評のほぼすべてに対して批判的で、やや過激とも言える彼のテレグラフ紙批判の言葉をそのまま受け取ることは出来ない。また、今回記事を掲載したのはサンデー・テレグラフ紙であり、ポイントンはその点で勘違いしている。とはいえ、「テレグラフ紙は長年にわたってディケンズに対して批判的だ」という彼の指摘は大変興味深い。というのも改めて調べてみると、確かに同紙には作家としてではなく、私人としてのディケンズに対する批判的な論調の記事が目立つのだ。たとえば過去10年ほどを振り返ってみても、2008年6月16日に“The Secret Affair that Almost Ruined Dickens”と題する記事を、2009年1月15日には、“Diamond Ring Could Prove Dickens Had Secret Love-Child”と題する記事を、さらに2016年1月26日には、“Charles Dickens was ‘an abuser of women,’ says Miriam Margolyes” (2012年6月に同紙に掲載されたものの再録)といった記事を掲載している。このうち3つめの記事は、ミリアム・マーゴリーの著書に関する書評であるが、マーゴリーのディケンズの私生活に対する批判的な表現をとらえ、そのまま表題に用いている。また1つめの記事は、エレン・ターナンとの愛人関係を描いたテレビ番組を紹介するものであるが、この記事についてディケンズ研究の大家であり、かつディケンズにまつわるスキャンダルの歴史をまとめた *The Great Charles Dickens Scandal* の著者でもあるマイケル・スレイターは、同紙が“New docudrama lays bare Charles Dickens’s obsession with a teenaged girl”と「舌鼓を打ちながら」(“lip-smackingly”)報じたと説明している(184)。スレイターのこの表現は、テレグラフ紙がディケンズに対して攻撃的であることを、スレイターもまた認識していることを示唆している。そして2つ目の記事は、ディケンズと義理の妹のジョージナ・ホガース(彼の妻キャサリンの妹)との間に生まれた(とされる)非嫡出子が所有していた(とされる)指輪を扱ったオークションに関するもので、

⁷ この手紙を取り上げたのは、英国主要メディアの中でサンデー・テレグラフ紙とインデペンデント紙だけであったが、そのいずれもがマリアットを“fan”と呼称していることは非常に不可解と言える。とはいえインデペンデント紙の記事は明らかに独自の取材に依らず、サンデー・テレグラフ紙を下敷きとして書かれている。そもそも同紙が記事につけた表題、“Never-before-seen Charles Dickens letter reveals rude response to fan”も、サンデー・テレグラフ紙の表題から一部の形容詞と名詞を同義語に変えただけであり、この記事については一考に値しないとさえ言う。

いわばディケンズにまつわる最大級のスキャンダルを報じた記事となっている。テレグラフ紙は2009年2月23日にも続報として、“Charles Dickens love-child rumour ring sells for £26,000”と題する記事を掲載しており、この話題に対する同紙の関心の高さが窺える。だが、先に挙げたポイントンが後半部分で特に問題視しているのはこの記事なのである。記事では、オークション会社の担当者が、オークション会場にやってきた人物がディケンズの玄孫にあたるイアン・ディケンズ氏の友人で、ディケンズ氏もこの指輪の来歴について保証したと述べた、と書かれている。だが、筆者がディケンズ氏本人に確認したところ、そのような事実は存在しないとの回答を得た。また同氏は、テレグラフ紙が彼に確認を取ることなく記事を書いた上、後日の謝罪・訂正を拒否したとも述べた。⁸このようなことを考慮していくと、一見過激に思えたポイントンの指摘もあながち的外れなものではなく、ディケンズのプライベートな側面に対してテレグラフ紙はきわめて攻撃的であるということ、そして少なくともディケンズを扱うという点において、同紙が必ずしもフェアな視点に立った報道機関とは言えないという事実が見えてくる。

マリヤットに対するディケンズの厳しい対応という部分にのみ焦点を当てたサンデー・テレグラフ紙は、次のように述べて記事を締めくくっている。

She [Marryat] appears to have been unperturbed by the sharp rebuke, going on to write her first novel five years later. By her death in 1899, she had written some 68 novels, with numerous other magazine and journal articles to her name. (Furness)

あたかも大作家ディケンズの圧力に屈することなく、ましてや彼の庇護を受けることなど一切なく、マリヤットが作家として大成功を収めていったかのような印象を与える文章である。しかし、これは大いなる誤解であると言わざるを得ない。というのも、ディケンズは後に彼女の求めに応じて、出版社に彼女と彼女の作品を紹介しているのだ。1870年3月、彼女は彼に対して出版社への紹介を求める手紙を送っている。以下に引用したものは、その返信として彼が書いた3月26日付けの手紙である。

My Dear Mrs. Church

I am here until the end of May, and shall be happy to see you when you come to town.

The friendly transaction of my business with

Chapman and Hall would be impossible unless it was distinctly understood between us that they are free to act for themselves in reference to any introduction of mine, without offending me. I fear therefore that my good word in that quarter is far less powerful than you suppose. But you shall have it. And I think it will not be of the less worth if you leave me to speak it, and if you assume—as you may—that you are already known to Mr. Chapman, through my having personally mentioned you and your book to him, and entreated him to give his attention to both.

Believe me always

Faithfully Yours

Charles Dickens (12:499)

まず最初に自身とチャップマン・アンド・ホール社の関係について説明し、自分の紹介はマリヤットが思っているほど有効なものではないと断りを入れた上で、それで良ければ紹介しておくとして述べている。そしてその言葉に違わず、彼はすぐにそれを実行に移している。翌27日、今度はチャップマン・アンド・ホール社に向けて手紙を送り、次のように述べている。

Mrs. Florence Marryat Church, one of Captain Marryat's daughters, has written to me for a note of introduction to you on behalf of herself and a novel she has in manuscript. I told her in reply, it was clearly impossible that you could manage your business, unless it was quite understood between us that you on all occasions regarded it from your own point of view, without giving me offence; and that she must not suppose my introduction to have any other influence than bespeaking attention for whomsoever I presented. I then added that I need give her no letter, as I would tell you of her, and she might consider herself introduced already. Will you bear this in mind when the lady besieges 193 Piccadilly. (12:501)

この2つの手紙を見比べることで、ディケンズが事情を率直に、かつ嘘偽りなく両者に伝えていることがわかる。手紙の中で触れられているように、直接推薦状を書くということこそしていないものの、彼女と作品を出版社に推薦するという役割は十分に果たしていると言えるだろう。

⁸ イアン・ディケンズ氏の説明によると、件の商品を出品したオークション会社が商品の値をつり上げるために振りまいた「根も葉もない逸話」(“a spurious story with no foundation”)を、自身のヨット仲間の父親でアンティーク関連の仕事をしている人物が本当だと述べたばかりか、ディケンズ氏もその通りだと述べていたと嘘の証言をしたという。本件に関しては抗議をおこなったものの、テレグラフ紙、オークション会社の双方が互いに責任があると言って譲らず、ディケンズ氏への謝罪もおこなわれていないとのことである。

う。もしディケンズが、単に若い作家に対して厳しいだけの人物であれば、このようなことは決しておこなわなかったであろうことは容易に想像がつく。実際に彼の助けが彼女にとってどれほどの意味を持つものであったのかは定かではないが、⁹少なくとも両者の関係が、サンデー・テレグラフ紙の記事が示唆するような、単なる対立関係で終わったものでは決してないことは明らかであろう。ディケンズは記事がそう印象づけるような、あるいは、そう印象づけようとしているような、若い作家を批判するだけの傲慢な人物ではないのである。

参考文献

- “Charles Dickens love-child rumour ring sells for £26,000.” *The Telegraph*. Daily Telegraph, 23 February 2009. Web. 8 August 2016.
- Davis, Paul. *The Penguin Dickens Companion*. London: Penguin Books, 1999. Print.
- Dickens, Charles. *The Letters of Charles Dickens*. Vol. 6. Ed. Graham Storey, Kathleen Tillotson, and Nina Burgis. Oxford: Clarendon Press, 1988. Print.
- . *The Letters of Charles Dickens*. Vol. 7. Ed. Graham Storey, Kathleen Tillotson, and Angus Easson. Oxford: Clarendon Press, 1993. Print.
- . *The Letters of Charles Dickens*. Vol. 11. Ed. Graham Storey. Oxford: Clarendon Press, 2000. Print.
- . *The Letters of Charles Dickens*. Vol. 12. Ed. Graham Storey. Oxford: Clarendon Press, 2002. Print.
- Dickens, Ian. “Re: Query about Dickens and the Daily Telegraph.” Message to Tomoya Watanabe. 5 August 2016. E-mail.
- Forster, John. *The Life of Charles Dickens*. Vol. 1. New York: Charles Scribner’s Sons, 1905. Print.
- Furness, Hannah. “Unseen Charles Dickens letter reveals rude retort to fan.” *The Telegraph*. Sunday Telegraph, 5 March 2016. Web. 31 July 2016.
- Gaskell, Elizabeth. *The Letters of Mrs. Gaskell*. Ed. J. A. V. Chapple and Arthur Pollard. Manchester: Manchester University Press, 1966. Print.
- “Lot 169 : DICKENS (CHARLES).” *Bonhams*. n.d. Web. 31 July 2016.
- Marryat, Florence. *The Life and Letters of Captain Marryat*. Vol. 2. London: Richard Bentley & Son, 1872. Print.
- Pointon, Tony. “The Daily Telegraph and Dickens: Re-imagining Circumstances of Marryat Letter.” Message to Patrick McCarthy. 2 April 2016. E-mail.
- . “Re: Query about Dickens and the Daily Telegraph.” Message to Tomoya Watanabe. 5 August 2016. E-mail.
- Sims, Alexandra. “Never-before-seen Charles Dickens letter reveals rude response to fan.” *Independent*. The Independent, 7 March 2016. Web. 31 July 2016.
- Slater, Michael. *The Great Charles Dickens Scandal*. New Haven: Yale University Press, 2012. Print.
- Sutherland, John. *The Stanford Companion to Victorian Fiction*. Stanford: Stanford University Press, 1989. Print.

⁹ ここで問題となっているのはおそらく小説第9作目の『ペトロネル』(*Petronel*)と思われる。同小説は同年7月に出版されるが、出版社はチャップマン・アンド・ホール社ではなく、ペントレー社であった (*Letters* 12:n499)。ただしこれがチャップマン・アンド・ホール社が彼女の作品を退けたためなのか、マリアットが何らかの事情で本社に行かなかったためなのか、あるいは他の理由によるものなのか、は不明である。